

日本人ブラジル移住110周年記念 特別展
移住ミュージアム 2018年



治雄の娘・マリアと甥・富田カズオ、パラナ州ロンドリーナ、富田農園、1955年

大原治雄写真展 ブラジルの光、 家族の風景

H A R U O O H A R A

2018
2/17 土 ▶ 5/6 日

入場無料

海外移住と文化の交流センター 1階特別展示場

開場：午前10時～午後5時（入場は午後4時30分まで） 休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）

- 主催：一般財団法人 日伯協会、神戸市
- 特別協力：ブラジル大使館、モレイラ・サーレス財団(IMS)
- 後援：神戸市教育委員会
- 企画：コンタクト

ブラジルの大地に生きた 写真家・大原治雄

開拓農民として日本からブラジルへ渡り、独自の写真世界を築き上げた日本人がいました。その名は、大原治雄。1909(明治42)年、高知県に生まれた治雄は、17歳の時、一家をあげてブラジルに移住、長い年月をかけて原生林を開墾しコーヒー農園を築きあげました。

24歳で、同じ日系移民・幸と結婚。その結婚式を撮影した写真家との交流が、大原を写真の世界へ導く契機となります。小型カメラを手に入れた治雄は、独学で農作業の合間にブラジルの大地の生命力と家族の姿を撮り続けました。1950年代からアマチュア写真家として、国内外の写真展に出品。1970年代に入ると、地元新聞に掲載され、次第にその名を知られるようになっていきました。1998年には、ロンドリーナ国際フェスティバルで初の個展が開催され大きな反響を呼び、その後もクリチバ市国際写真ビエンナーレに2回連続して紹介されるなど、ブラジル国内で高い評価を受けるようになりました。

1999年、ついに故国の地を再びみることなく89歳で永眠。2008年、日本人のブラジル移民100周年を記念して世界屈指の写真アーカイブであり美術館でもあるモレイラ・サーレス財団(IMS)に、ネガやプリントをはじめ写真用機材、日記など一連の資料が遺族により寄贈されました。本展は、IMSの全面的協力により代表作30点を展示します。

本年は、日本人のブラジル移住110周年に当たります。この記念すべき年に、ブラジル移住者の心の故郷といえる「旧国立移民収容所」で、大原治雄の写真展が開催されることは望外の喜びです。17歳でブラジルへ渡って以来、故郷の地を踏むことのなかった大原治雄の叶わなかった願いが、彼の残した写真による展覧会という形で果たされることとなります。



霜害の後のコーヒー農園、1940年頃、パラナ州ロンドリーナ



朝の雲、1952年、パラナ州テラ・ポア



花壇での遊び、1950年頃、パラナ州ロンドリーナ、シャカラ・アララ

©Haruo Ohara/Instituto Moreilla Salles Collection



家族の集合写真、1950年頃、
パラナ州ロンドリーナ、シャカラ・アララ



- JR・阪神電車「元町」東口より鯉川筋を北へ徒歩15分
神戸市営地下鉄「県庁前」より、徒歩10分
- 神戸市営バス: 「三宮駅前」または、「元町駅前」から
⑦系統に乗車「山本通3丁目」下車、北西へ徒歩3分
または「山本通4丁目」下車、東へ徒歩3分
* お車の方は、当センター北側の有料駐車場をご利用ください。

NIPPAKU Since 1926

一般財団法人 日伯協会 Associação Nipo-Brasileira

〒650-0003 神戸市中央区山本通3丁目19-8 海外移住と文化の交流センター2階

電話・ファックス 078-230-2891 E-mail info@nippaku-k.or.jp

URL <http://www.nippaku-k.or.jp>